

「遺していく ゆりあへ ママのかけた魔法」を見て

ドキュメンタリー番組：「遺していく ゆりあへ ママのかけた魔法」を見た。

妊娠4か月の時に余命5年とガンを宣告され、抗ガン剤を使えば赤ちゃんは助からない。抗ガン剤を使わなければ長くは生きられない。夫は母と子、両方の命を願った。

がん治療を優先して子どもを諦めるかの葛藤の末に出産を選び、がん治療を中断し娘を出産したが、がんは既に他の臓器脳にも転移し余命半年と告げられる。

余命半年と宣告された時はパニック状態になり「ママは死にたくない」と嘆いていたが、がんの痛みと余命の時間との闘いの中で、娘が成長する中で悩むだろう様々なこと（学校、友だち、制服、おしゃれ、お金、恋、SEX、等々）で、パパでは伝えられないであろうママとして女性としての心得やたしなみ等々を自分の言葉で娘のために手記を綴ることを決意する。

そして、自分に代わり本を見た方が娘に手紙をくれ、いつまでも娘のことを気にかけてくれるのでないかとの「魔法」をかけるために、あとがきに「この本をお読みになって、よろしければぜひゆりあにお手紙を送っていただければうれしいです。」と手記を出版（書名：ゆりちかへ ママからの伝言）する。

母は娘が2才の時に逝去するが、母親の魔法のお陰で娘の元にはたくさんの読者から母親代わりの手紙が届いているよう。

この番組のような母親を知ると、どうしても洋の東西を問わず時代を問わず、母子像を描いた絵画、彫刻に思いが行く。

恐らく、母親の子どもに注ぐ「無償の愛」に、人としての愛の理想像を人々は観るからでないだろうか。

「無償の愛」とは、言い換えれば、子ども（相手）自身が生きる力を育む支援・援助を続けるといふことでないだろうか。

番組の母親は、無償の愛どころか自らの命に代えて娘に生命を授け、死後までも娘に愛を注ぎ続ける「魔法」を考え出した。

振り返って、虐待や無理心中は、子どもの生きる力の前提・必要条件である生命を奪うことであり、「無償の愛」の対極のような気がする。

人として生まれた人間が、成長していく過程で、何故にこの異なりが生じて行くのだろうか。

つくづく「人の心」というものの不思議さを感じるし、その異なりとなるであろう要因を知りたいものである。